

千那伝書『鳳鳴談』考

復本 一郎

小稿は、芭蕉の弟子で、近江堅田の真宗本福寺十一世住職三上千那せんな（慶安四年1651～享保八年1723）の著作とされている俳論書『鳳鳴談』を、私の架蔵本によって翻刻紹介しつつ、検討を加えることによって、芭蕉俳論、および芭蕉俳論享受史の一側面を明らかにせんとするものである。千那の他の俳論関係の本格的著作としては、管見の範囲では、中西啓氏紹介の「蕉門千那俳諧之伝」（『近世文芸資料と考証』Vol. 7、昭和47年2月）と、太宰府天満宮・西高辻家蔵の『芭蕉雑談千那聞書』（仮名）の二本が伝わるのみであり、他の蕉門関係の俳論書とのかかわりにおいても、『鳳鳴談』の出現は、すこぶる興味深い問題を孕んでいると思われる。

最初に架蔵本の書誌を記しておく。『鳳鳴談』に他の伝本はないようである。縦たて二十一センチ糎、横十四・九糎、半紙本一冊。墨付三十六丁。表紙は群青色、題簽は、枠無し白紙に雲型空色模様、縦十二・五糎、横三・五糎、「鳳鳴談」と墨書、左肩に貼付。内題も同様。寛政七年（一七九五）写本。ちなみに、寛政七年は、円山応挙が六十三歳で没

した年である。

まず、本文の翻刻を示すことからはじめるが、翻刻にあたっては、表記を現行の字体に改め、筆者によって句読点、濁点、振り仮名等を施した。また本文の章段の下に、便宜、私に通し番号を付した。なお、原文の明らかな誤りは、その文字の右に（ママ）と付した。虫食いは□で示した。

一 「鳳鳴談」本文の翻刻

上巻 俳諧ノ興

一① 発句調練之教

発句は、先、其題の心を深く勘弁して、是を味し。題に成る物、ならぬ物有。春の野、秋の野は題に成る、秋の山峯、春の山の題は用ひず。田植、茶摘は題にて、大根引、午莠がりは、題にならず。先師、大根引といふ事と端書をして発句せり。余を是より知るべし。春の暮は、暮春の事也。秋の暮は、秋の夕暮と云事也。

神祇の題に向はゞ、いかにも其心を恭く、釈教の題は、殊勝に、旅はあはれに、おかしみをそへ、恋の題は、心の奥を一筋にして、人は我を忘るゝ事有とも、こなたは人をわすれじと思ふが本情也。其外、無常、述懐、々旧、各々その心を得て案べし。交友の句は、礼を厚して信を専に、君臣父子の句、かりにも不忠不孝有べからず。

一② 案方の伝は、題の外にかけ合と云物を求て、発句に仕立る也。

一③ 句作りは上ミを下へなし、下を上ミへあげ、聞え安く、口に唱へやすく仕立るなり。畠山兵衛の佐と云は聞よ

く、山畠助兵衛と号しぬれば、無下におとる句作りと云は是也。

一④発句は、巻頭に立物なれば、大将の位なくては成がたし。いかにもたけ高、尋常に仕立べし。すはる、ふれると云事有。

一⑤首きれ句といふ事、小文庫に云へる、あやまり。

はれ物に柳のさはるしなへ哉

是、首きれ也。

はれ物にさはる柳のしなへ哉

也。

一⑥案じ方秘伝、題を宮の内に入て、其上にあがり、大虚にむかひて天地乾坤の間を廣ク搜し求べし。題の中ばかりを案じ居たらんは、案じ所狭き也。

一⑦ 切字の伝

咲みだす桃の中よりはつ桜 翁

行くて倒レ臥とも萩の原 曾良

是等、落着したる句也。

追出しのうきねに花の朝鳥 千那

切^レや、捨^レや、遊^ぶや、疑^のや、願^のや、すみのや、挟^{はさ}や、休^メや、名所のや、口あいのや、是等^{なり}也。

一⑧切^レやは、夕立や、朝顔やの類、上五文字のや也。^{なり}

一⑨捨^ルやは、おもは^ズや、子孫かやの類、下の留^{なり}り也。

一⑩遊^ぶやは、

出女になげて通るや大根引 許六

一⑪やすめやは、是^{これ}は又少し替^{あり}り有。

いかめしき音や霰の檜木笠 翁

一⑫疑^のやは、けふよりや、あすよりや、人やみる、花や散らんの類。

一⑬願^のや、

蓬萊に聞ばやいせの初便 翁

一⑭すみのや、

むざんやな甲の下の蟋蟀きりぎりす

翁

三字めを口あいと云いひ、四つめをすみのやとし、五つ目に切レやといふ。切字の穿鑿にてはいくつ目とは限かぎべからず。是これ、蕉門の習也なり。

一⑮名所のや、難波津や、春日野やの類。

一⑯挟ミや、

旅をして見しや浮世の煤払

是を中のや共とも、はさみや共ともいふ云。

一⑰口あいのや、煤や払、水やのむの類。

口あいのや、名所のや、五文字うたがいや。

夕顔や秋は色かなくなりのふくべ哉

此や文字、皆このくなり哉と留る也。

一⑱下の五文字切、

眉掃を面影にして紅の花

翁

馬籠にわかれてひとり秋の暮 千那

是、下の五文字に何にてもあれ、季の詞をつがひて中の一字の手爾葉を置習也。其てにをはの内、大かたの、字多し。外の手爾葉にても切るゝは同じ事也。又、

香の火に尼の相住鹿の声 左角

一①⑨韻字切、又、三段切とも云。

奈良七重七堂伽藍八重桜 翁

夏の月白波さけぶ由井の浜 千那

吹れ行身は七里半ちる一葉 千梅

是、一句五七五の留りを皆韻字にて仕立ル也。

一②⑩三名切といふは、物の名を三つ寄たる物也。

梅若菜まりこの宿のとり汁 翁

一②⑪二字切。

はやくさけ。九日もちかし。菊の花 翁

一 ②②三字切。

面白し。雪にや。ならん。冬の雨 翁

梅白し。昨日や。鶴を盗まれし 翁

是等は、切字いくつにても其心品替りぬれば、一句落着する也。同じ切字二つにては落着せず。うたがいと治定の切字に氣を付べし。

一 ②③四字切

はつ真桑四つにや切らん輪にやせん 翁

此切字四つ有。皆うたがいの字也。疑の切字には、いくつにても落着する也。

一 ②④ぬ文字の事、不のぬ、畢也ぬ也。不のぬとは、のまぬ、よはぬの類、不の字に通ふ。畢也ぬとは、さめぬる、酔ぬると、るの字に通ふ也。此外に、はねぬといふ習有。淡路かた通ふ千鳥の鳴声に幾夜ねざめぬの、ぬ也。

一 ②⑤らんとはねるには、やとか、何とか、いつとか、上ミに疑の文字を置てはねると斗心得たれど、いひ流しのらんと云もあり。しづ心なく花のちるらの類也。

此外、大廻し、玄妙切、なんど云口授流布の書に多出しぬ。誤れるもあれば、当れるもあり。惣じて、六か敷切字、蕉門にせぬ法と心へべし。好ぬ事也。古翁、大廻し、玄妙切の句、一生なしと云。

脇の句、心持、付様、数種^{あり}有。先、発句にいひ出したる意味をうけて云繼ぐ心也^{なり}。或は一手柄別の事をいひたがり、発句心を云^{いひ}ほどき、打返しなどするは脇の句の本意ならず。大に悪し。

手尔葉留^メ功者の所為也^{なり}。十百韻、十歌仙などには手尔葉留^(ママ)も、脇もなくて叶はず。但し、下手にすれば平句に成也^{なり}。発句三月^っキに渡る物なれば、脇にて其月^{その}を定る也^{なり}。

五つの付方^{あり}有と云は、

むかふ付、对付、心付、ちがい付、比留也^{ころどめなり}。

此五つの脇の事、世本見へたるも有^{あり}。吾門の心と聊かはり有^{あり}。其五つは、

对付、違付、打添付、心付、時分付也^{なり}。

对付は、

名が声かほとゝぎすとは郭公

卯の花や垣かきや卯の花

違付は、

紙子着て川えはまらば竜田かな

冬の吉野は宝なき市

对付の裏^{いひ}を云たる付やう也^{なり}。心は对付とひとしく、言葉違ひたれば也^{なり}。

打添付、

名月や前に名高き東山

鈴虫鳴て誉る松あり

ひがし山に松と打そひたる也。なり。

心付、

杖笠の番はたれく初時雨

むかしをけふに咲かへり花

古翁遠忌を弔句也。なり其心は此翁は、生涯を行脚に終り給ひぬれば、滅後の杖笠、第一遺物也。なり其番は、たれく
ならんと、其昔をしたへる心をうけて、今の俳風は、其かへり花なると、心にて付たる句也。なり

時分付は、

朝鷹の引すへられぬ鴟の声

野は雲風に赤菜ぬく比ころ

豆まく比ころ、ほとゝぎす比ころ、花の比ころ、いくらかも有べし。是、時分付也。なり

此外いくらかも云事なれ共、此五つの間を洩べからず。随分発句の光りをかゝぐべきを上品の脇と云。いふ

一②⑦脇に哉どまりする事、大秘事也。

色はむかし上手の手際杜若

千梅

今日鳴て来て時鳥かな

千那

発句は、忘たり。わすれ

初卯の花のア、白哉かな

支考

目鼻だち迄(ママ)口利なるかなく

是非にいわれぬ浮世なる哉かなく

物おもわするほとゝぎすかなく

今様に打返して吟ずるよふにするが習也なり。

一②⑧花の句に、桜の脇、秘伝也なり。

辛崎の松は花より朧にて

翁

山はさくらをしほる春雨

千那

発句の花、桜か、さくらにてなきか、其出所を。脇もさくらなれば、七句去也なり。

一②⑨ 第三之姿

発句と脇は一躰にして、客のごとし。第三は、相伴人しやうばんの座敷に列りたるのごとし。句がら賤いやしからず、たけ高く、平句に落ざるやうに習也なり。扱さて、付はだへは少き所にたより、転じて付過ぬ様に心得べき也なり。て留、らん留、もなし留。に留などにもするなり。抑そも第三に、留り手爾葉の定りたるは、第三の姿を調へん為也なり。大切のもの也なり。一句つまらず、不連続になきやうを心がけてよし。て留、らん留などにて留るといふは、意味を云つめず、句情残るやうに作る也なり。

一③⑩哉留りの発句に、にて留めの第三せぬ也なり。其故は、治定の哉かなは、必にてに通ふ故なり。疑の哉、或は云いひながし

の哉は、にて留りの第三苦しからず。能々見届てすべし。

一③らん留の習は、押へ字なくてはねる事也。

先、通途は、何、なぞ、いつ、いかに、いく、誰、かは、かも、さぞや、撫、と疑の言葉にて押へて、はねる也。押へ字なくてはねるといふは、上にて疑の心を含めてはねる也。又、云ながしてはねるは、則、らんが疑になるやうに句作る也。

山ごしの朧は月の句ふらん

是則、らんが疑になる句作り也。

一③②いひ残して第三ノ姿を調るといふは、

下駄の齒に一筋黒く解初て

是、第三ノふりを調へん為、雪の字をいひ残したる也。名句也。

一③③にて留の句、上ミに現在のし文字有てはにてと留らず。是も手尔葉違にて落着せざる也。

里遠し行もつゞかぬ山路にて

是、留らず。能勘弁すべし。とかく手尔葉違也。

一③④に留りの句に能句希也。第三、留リ多中、殊にに留りの句、句情を云残さん為の手尔葉也。

馬時の過て淋しき牧の野に

是、翁の第三也。此牧の野、月花雪、惣じて風雅に動く程の物、皆句情にありて、いひのこしたる也。

唐土は郭公迄春鳴て

のびあがり覗く垣ごし花見へて

是等、て留の手本成べし。句情を云残たる事、右にひとし。

一③⑤第三字留、世間にて大事におもへども、別にはなし。とかく第三の姿、ふりを付ん為にて、らんなどゝ留る也。第三の姿調ひたる上は、別の穿鑿なし。しかし上手わざ也。但し、一句の内になんとか、てとか、もなしとか、手爾葉をつかひて云わけとすべし。先は、好ざる事也。冬ノ日集に、

花棘馬骨の霜に咲かへり

桎ひの木山家の躰を木葉ふり

雲雀鳴小田に土持比なれや

か様の第三も有。是皆名人の所作也。第三のふり、姿申分なきに定りたる句共也。是等にて悟入すべし。

一③④四句目、六句目にふり有りと云事、書々に出したり。其習は、惣じて沓冠の揃ひたる句、のらぬ物也。心得べし。

一 37 付合の差別

俳諧付合の本情を、古へ宗祇翁などの記置給ひし物にて思ひ合するに、誠に世の教戒に成ぬべきわざならんにこそ。彼記曰、夫、敷嶋の和歌の道は、心、言葉高ウして、今更いふべくもあらず。連歌といふ物は、始より聊歌書の片端をも学ばずしては、一句一言も云がたき道也。俳諧は、俗談平話によりて人の心を述侍れば、先、其道に入事、安し。扱、僅に道に入ぬれば、則、田夫野人も花鳥に心を寄せ、四季折くのことぐさを翫びて、風雅、風情のやさしき心を弁ふるより、自然に上古の風俗をも知り、をのづから人の人たる道にも至ぬべきわざ也。頑愚、卑賤の族、何となきやさしき心にも成り、世の情をも弁ふべき道、俳諧より速か成はなしと云し。されば、日々のわざを俳諧になして、かれに付合を付て見るべし。かりにも不忠不孝成べからず。及び、無理、非道、邪路に入べからざるの道理、明也。たとへば、年若き人の、武親にいたくいさめられん時、腹だゝしき心の出んに、親といふ句に、子として腹立ん付句を付て見るべし。全俳諧の本意にあらずして、付合に成べからず。彼親の打杖のよわきを悲しびし心こそ、前句へ能のりて、付合の本意成べけれ。此本情を實にしらば、など腹立ッ心の直ひるがへりて、孝心もおこらざらまじや。又、主君につかふる人の、おほやけ事を後になして、己が心の趣く方に行ひもて行たらんは、付合に成べからず。総て、兄弟、交友の世間の事に付ても、日々の諺、俳諧の付合になして見ば、少しも邪に趣べき道なからまし。

一 38 付合の句は、かたつまらず、不落着になき様にすべし。堅き句の跡へは和らか成句を付、花過たる句の次へは、実ある句を付る習也。一句く留りを見合、字留、手尔葉、入交る様に心がけべし。

一③⑨能句つゞきたる時、習なき人は、一入力を入、又、夫よりも増りたる句をせばやとはげめり。大きに非也。秀逸と思ふ句、一、二句もつゞきたらん、其次、いかにもかるくと付る習也。さやうの次、かるく云流したるは、秀逸にも増りてめやすく、面白し。とかく一巻のへんさに心がくべし。秀逸といふものは、日比の功によりて、しぜんに出来也。こしらへてならぬ事也と心得べし。

一④⑩付合の句の姿といふ、是、発句は大将の威なければ巻頭に立ず。平句は士卒の働なければ鈍にしてあしく、句のふりに心をばかくべし。

一④⑪付合第一へん化に心を付け、句情、前の句へもどらぬよふに第一心をかくべし。いかやふの名句成共、打こしへ心のさはる句は役に立ず。季節の用様などは、脇の句とは違ひて、同季の内、前後少の違ひ苦しからず。心持、用捨は有べし。腸をつよく案じて、安くいひ出すといふが蕉門の習也。

一④⑫ 趣向は八つ有

付はだへの習、五つ有。是、趣向とは別也。

気色、匂ひ、ひゞき、走らし

推量付

乗かけの挑灯しめす朝嵐

木導

汐さしかゝる星川のはし

許六

是、氣色也。

一りん咲るしやくやくの窓

翁

妻の喪に曇る涙の朧月

千那

是、匂ひ也。前の匂ひをとり、ほのめかせたる也。

稲の葉延の力なきかせ

珎碩

発心の初に越る鈴鹿山

翁

是、ひゞき也。力なきと云響にて、発心の初と出たる也。但し、西行のうき世をよそにふり捨ての歌のひゞき有也。

数珠つぶをまぎらかしたる腹葉

汶村

湯好き旅ずき木枕の夢

木導

是、はしらかし付也。少しよせ有べきこと取合せていひはしらしたる物也。前の三躰は、前句の心、言葉より姿うつりて出る。此走らかしは、取合せ物也。此さひ能く弁へ学べし。

札焼て刀斗を譲りけり

千那

つれなき美濃に茶屋をして居

翁

是、推量也。かく有そう成事ぞと推量して付也。ケ様に存ルははづれまじと云付方也。又、刀にみのゝ縁有。面白き風躰也。

右五つの付方、脇の五躰とは心替り有。脇は発句の余情を一句に述べれば、外の所を求ルに及ばず。平句は、一廉離れて心通ひ、或は、言葉縁有て、又、寄せ物也。此かひ、能く弁へし。

一④③一句の新しきと云、是、趣向に有。新しみと云は、句作り有。コツケイ伝に具に委ク有。精進日は先古からあぐる也。是、常躰也。

祖父祖母の精進あいまびかれて
是こそ同じ句が少なしく新しみ出来る也。

精進日をつけてむすこに世を渡し
是有ふれたる事より、古人云残したる所也。
凡新古の差別より悟入すべし。

一④④春秋に恋をむすびたる句の次へ、恋のなき春秋の句有べからず。しかれば、春秋の三句めには、恋結びたる句、遠慮する習也。夏冬も同是に准ずれば、二句めに恋結びたる句、すべからず。

一④⑤真行草といふ事有。是句作りに有事也。尤、心躰不二にて離れざる物故、句情も通ずべし。

真の句

猿三声に有明の空

行の句

洗足の湯の光る夕月

草の句

星もはらりと能星節句しや

凡、真行草は、句作りの穿鑿也と知るべし。

一④⑥當時、俳諧はつかぬが能とて、程らい知らず、別々の事ならべ侍る、言語道断の事也。先師の曰、俳諧の連歌也。能付といふ字心也。今蕉門の骨髓といふは、間に髪といれず、一字も動かしがたきこそ俳諧の連歌とは云べけれ。又、付句と付るとの差別也と云り。付といふは、自然の道理也と云。

一④⑦ 月花の捌

月花には、昔より定座有りて、むぎとはせぬと云事は知りて、其定座は何故定めたと云事を知らざれば、自在を得て月花の句成まじき也。凡、月花は一卷の骨目なれば、一座斟酌時宜ありて、功者に譲り、平人は貴人に譲り、或は、一座の達人も一旦は謙退して、客且而せず。故に、八句表の内七句迄残せり。八句目は、下の句なれば、七句目を定座と定めたと知るべし。花の十三句目も、又、しか也。歌仙の時、五句目、月、裏の十一句目花も同前也。一座の宗匠貴人などは、じねんに、更に其かまひ有べからず。それを、よびみし花杯云も、誰もする事、片腹いたき事也。

一④⑧月花結びたる句は、猶以大事也。功者入つぎ場也。雪月花の句、同作有べからず。発句の作者、花の句、遠慮なしにも苦しからず。

一④俳諧定座の花、桜と覚へたる作者、大きに非也。唐朝の花は牡丹にして、吾朝詩歌の花は桜也。連歌俳諧の花は、桜にも限らず。唯、賞翫の惣名也。何にても賞して花と云たる物が花也。茶の出花、藍の出花、花火、花塗、花かいらぎ、皆正花也。是を以て知ルべし。

一⑤月の句の事、或は、見渡し、打越に月次の月など出て、同字遁がたき時、有明、弓はり、盃の影など、月の字を隠してする事、常の事也。同字、さし合もなきに、有明、さかづきの影、おかしからず。又、星月夜は、月に用ず。尤、只秋也。宵闇の句、月に用られたる事、廿五ヶ條にくわし。

一⑥むかしは、月花の句は勿論、雪雨郭公の類迄も、一座時宜、斟酌ありて、功者、或は貴人の外はせざる也。今の世、月花などせり合て仕る事、言語同断、有るべき□なし。

一⑦宗祇翁の時代迄、百韻に花三つ、雨一つ。宗長の時に至りて、今、花一つ、雨壱つ、勅許を蒙り度旨奏聞せられて、花四雨二に定りぬる。されば、俳諧は地下の俗談にて、公界成事はなしと覚へたる。旅も、是等の事を知らぬ故也。総て、月花は、一座の骨目也。ゆるがせにおもふべからず。

一⑧ 一座之法 并 執筆之法

俳諧の連歌は、仮初ながら吾国建立の源、大和歌の一躰にして、末世の俗詠に神慮をすゝしめ、君をいわる、其余流四海に及ぼして、人倫の和ぎ交るの道也。しかれば、一座の礼法たゞしく、時宜、会釈専にせずんば有べか

らず。先、上座に貴人御座あれば、其次に一座の宗匠、次に文台あるべし。

二見形文台の図有。寸法有。

短冊、色紙之寸法有。

下巻

一 ⑤4 発句、脇、第三、表八句の事

発句は、発句の姿有、平句は、平句の姿あり。発句は、大将の位なくしては巻頭に立ず。平句は、士卒の働なくしては、鈍にして役に立ず。それぐの役目有。先、此心持第一の習也。発句に切字と云物を定めたるも、発句の姿を付ん為也。一句に曲節ありて、それはかう、是はそうと埒の能わかれて、切字もおのづから備り、風姿の調ひたるを発句と云也。

一 ⑤5 脇の句は、発句と一躰の物也。別に異なる趣向を求めからず。平句の付合とは大きに違たる事也。只、時節の景物など取合て、発句の余情を述顯して、其光りをかゝぐるなり。脇に五つの付方有。前に有。

一 ⑤6 第三は、相伴人のごとしと云り。節ありて曲なし、或は、半曲半節ともいふ也。転の句といふこと、皆いふ事也。脇に對しての事也。第三のみに限らず。脇の外は、百韻は百句ながら皆転の句也。是を變化といふ。變化せ

ざれば、蕉門の俳諧にあらず。但シ、第三の句は、第三の形にせん為也。其形、発句のたけに似て、曲節の調らざる所、第三の形也。次の句へ及すべき心也。兎角第三の句、意の残りて、つまらず、又、不落着になきやふにする習也。

一 ⑤⑦第四句めにふり有といふ事、先、発句、脇、第三と嚴重に物の極りたる次の句なれば、かるき句を好めるは勿論也。其かるさを皆四句めのふりと思ふて居る也。さにはあらず。其ふりといふは、沓冠の揃ひたる句は、四句めにのらぬ物也。是習也。

一 ⑤⑧第五、第六、さらくと大やうに、奇言を求ず付べし。第五よりの句拍子にて、おもてと裏のわかるゝやうにすべし。是、習也。

一 ⑤⑨七句目は、月の座也。貴人、高位に譲り、又は、貴人も一座の功者にゆずりて、たやすくせず、等々時宜の礼式ありて、すまでもらしたる物也。但シ季の差合あれば、前へもよび出し、後へもこぼしてもする也。但、表の月は、こぼさぬ法也。宗匠の言葉を給ひてする也。表の月は、やすらかにする習也。

一 ⑥⑩八句め、裏へのうつりなれば、かるく流して、はやくすべし、すべて表八句、理屈らしき句、一切有べからず。神祇、釈教より初め、恋、述懐、哀情に至る迄、表にせざるも、重く、ふし立たる事を嫌る謂也と知るべし。

一 ⑥1 四折に曲節地のくばり有事

俳諧百韻は、四折八面にして、表裏の句法有り。活法の書に、百韻に四つの物は折を嫌ふと云シ。百韻に八つの物は、面を去と書けり。是ひとつの習也。面と表のちがひ有事を知べし。表の時は、表裏にて、四折に表は四所也。面を去といふ時は、裏も面の字を用ひて、八面也。これにて折を嫌へる物と、面を去物との差別を知るべし。

一 ⑥2 初折は、地を専にして、総て奇言怪語を求ず。当句も、付心も直なるべし。其故は、表の七句めにはや月有、

裏の十句より、又、月秋にして、十三句めは花の定座なれば、初折は、月花の義式も多く、俳諧の礼法正しき所也。よつて、地を先にして、曲節を嗜むべき場と知るべし。勿論、恋句などに心を付べし。当時、裏の折かへしよりも、はや恋を出す類ひ、不遠慮の第一也。二の折にいたりては、半地半言と心得べし。初折の礼法をほどきたる物也。礼の用は、和といへる塩梅也。其礼を知るべしと也。三の折は、俳諧の遊び所也。専ラ花やか成言をかざり、おかしみを求めて、曲節を尽すべし。されども、和すれども、礼を忘れずといふ掟は、何の道にも在也。ことに俳諧は、実に居て虚に遊ぶの道なれば、猶又、是を用ひずんば有べからず。扱、名残の折は、一卷の首尾なれば、其座の時宜をはからひ、其句のよしあしにかゝわらず、人に屈せさせぬやうにすべし。まして、句ひの花名残の花、あげ句に至りては、尊貴の人を待すれば、一座不興に成りて、俳諧せぬにはおとりなり。俳諧は、言語の遊にして、語を以て和交るの道也。其徳については、たまく尊貴の傍へも出べき事、勿論也。されば、妙句に一座を不興せんよりは、疎句に其座の首尾をととのへよと、先師翁のいましめ也。

一 ⑥3 付合の句変化の事

同趣向八つ有事あり

其人 其場 其物 其噂 但シ前句、噂ニハ非ず。心得べし。

天象 観想 面影 時分 又、時節時宜。

一 ⑥4 心持に四つの品有事あり 又七名八昧とも註せり。

有心 会釈 拍子 遁句 起情 気色 向付

此外、気色、句ひ、ひゞき、はしらかし、推量付などといふ習、是は親疎の付はだへにて、別に習有事也。なり又、空撓といふ付様も有。あり皆変化の為也。なりとかく第一は変化也。なり前句、其人なれば、次は、或は其場にて、其物を付、時分、天相(ママ)と付ちがへて行ば、をのづから変化して、三句の当りに苦しむ事なし。此所、それぐの句共あり。

一 ⑥5 月花の句、晴の会にて同作有べからざる事。あり

一 ⑥6 発句の作者、花の句、遠慮すべからず。

一 ⑥7 俳諧と誹諧の字の事、蕉門には俳の字を用ゆるわけ有事。あり

一 ⑥8 発句にも、平句にも限らず、句の新しみといふこと、コツケイ伝の奥に有。あり

一 ⑥9 蕉門に習の切字の事

心切 是は句情をいひのこして、心にて切るなり也。

いざゝらば雪見に転ぶ所まで。

頓やがて而死ぬけしきも見へず。蟬の声

一 ⑦0 中の切 是は句の真中迄言を延のばして、一句を二つに読よむやうに句作る也。

猫の恋止む時。ねやの朧月

やすくと出ていざよふ月の雲

一 ⑦1 挨拶切 是はこれにそれを、それにこれをなどゝ、自他の挨拶をするやうに仕立したてル。

世を旅にしろかく小田の行戻ゆきもとり

人に家を買かはせて我は年忘レ

一 ⑦2 四つの切 是は、一句、五七五と三つにて有あべきを、四つに句読するやうに句作る也。

夕にも。朝にも。つかず。瓜の花

空鮭も。空やの。瘦も。寒の中

一 ⑦3 を廻まはシ、に廻まはし 是は、をの字、にの字、どこにおいても、其一字にて一句を転ころがすやうに句作る也。

青くても有^{ある}べき物を。唐がらし

米くるゝ友を。今宵の月の客

桐の木に鶉鳴なる塀の内

柚の花に昔^(ママ)ふ料理の間

一⑦④押へ字 是^{これ}は七文字の留りをエケセテネヘメレの横かなにて押ゆる也^{なり}。

四方より花吹入^{ふき}れて鳩の海

五月雨の雲吹落せ大井川

一⑦⑤句読切て 是^{これ}は、すらく^くと下の五文字へ懸ていひつゞくる作りやう也^{なり}。但^シ、下三字を句読する也^{なり}。是^{これ}を沓切ともいふべし。

忘れずば佐夜の中山にて涼め

海暮^くれて鴨の声ほのかに白し

一⑦⑥切所なくして、それはかう、是^{これ}はそうと埒^{らち}の能^よク分^れて、云分なきといふは、

降^ふずとも竹植る日は蓑と笠

木啄も庵は破らず夏木立

以上、習の切字、何れも古翁の秀吟を引句に用^{もちふ}。余は、是^{これ}に准^{なぞら}へさとすべしと云々。

一 ⑦⑦ さし合、去嫌の事

去嫌は、万、連歌に一と有物を、俳諧には二つよし。三つ有物は、四つとなし、六つ有物は、八つなせるより、七句去りし物は、五句去にし、折を嫌へる物は、面を嫌ふとゆるしたれど、惣じて、それにもかゝるべからず、山川草木、鳥獸、器財、食、服にいたり、目に立、耳に響く物は、見渡しに遠慮すべき事、勿論にして、人の制せずとも、我と其用捨は知べき筈也。たとへば、ほとゝぎす一つ、杜鵑、不如婦といひかへて、又一つ、と、おだまき、はなひ等の書にはあれど、蕉門にはこれを免さず。其故は、右の二品、音も訓も同じ郭公、牡丹也。たとひ異名にても、同躰の物は、我門には免がたし。又、同名成とも、異躰ならば、ふたつも三つもすべし。たとへば、牡丹と出たりかも、もゝ引のぼたん、又牡丹餅といわざ、折を替へ、面を去ていくらもすべし。青柳に柳楊とは免しがたし。柳樽とはすべし。桜と書て、桜鯛も異躰也。豆腐と書て、おかべと名をかゆるも同じとふふ也、是は赦さず。但シ、同躰の物も、鶯、螢、蟬の類ひ、春、夏、秋と通へる物なれば、残の字を添、或は夏秋の字を入ては、二つも有べし。

一 ⑦⑧ さし合といふは、語路の拍子、手尔於葉の重るなどを吟味する事也。同じやうに拍子をつゞけ、或は、似たるやうのてにをはの重りたるは、俳諧ならでも知べき事也かしが、文字で文字る文字など心を付べし。俳書に差合となきとても、悪きは、己と知べき筈也。言語さはやか成者の、主人の使請取て、長口上をいふがごとし。ねんごろにして人とからず、言重らずして、一く能わけの聞ゆるが弁舌利口の者也。一所にても云廻しあしければ、今のは悪し、と人も知り、我も知べき事勿論也と云々。

一 ⑦9 季節のまたげたる物蕉門に習有事

藪入、出代、彼岸、峯入、鴈、燕、此類ひ、後の字を添、或は順逆の字を以て春秋を分ちぬれど、我門にはそれに及ばず。春句へ付ては春、秋句へ付ては秋とすべし。但鴈、燕は、帰來の字をかへてすべし。

一 ⑧0 鶉、鶉、目白、頬白、瑠璃、鶉故、鶉、鶉の類ひは秋の渡り鳥なれど、一句はなれては雑とすべし。春秋につれては季たるべし。帰來の字を断ルには及ず。

一 ⑧1 雨乞、懸乞、夏冬と急度は定がたし。一句の時は、是も雑たるべし。

一 ⑧2 節句は三季に有物なれど、付句につれて皆、其季たるべし。発句の時は、桃、あやめ、菊と断たるも宜しき也。

一 ⑧3 棕鳥、檉鳥、菊いたゞき、豆廻シ、山雀、日雀、四十雀、皆秋也。渡り鳥也。されど、帰ルといふ字を断て春にも用ゆべし。駒鳥は決して春の物也。渡ルといへば秋に成也。

一 ⑧4 升鷄、活法の書には秋の渡り鳥と皆云置しかども、全ク我門に冬に用ゆべし。

一 ⑧5 水芙蓉は、同秋の部になし置しかども、決而夏にすべき也。瓊にも水芙蓉、蓮の一名と有り。

一 ⑧冷汁、冷麦、冷水の類、古法、皆秋なり。冷の字になづみて誤れり。俳諧は俗談平話の姿情なれば、冷の字かゝる事なし。皆夏に用ゆべし。

一 ⑧星月夜は、秋也。月にあらず。卯の花月夜は夏にて、賞翫の月に用ゆる也。青葉は夏にあらず。若葉として夏也。

一 ⑧虫、礎は、兎角夜分なれども、夜分のさし合はなしと心得べし。

一 ⑧夜着、蒲団、足袋、頭巾、袷、扇、発句の時は当季を持て、平句の時は、差合をくるべからず。但シ、其一句に夏、慥に冬と見ゆる時は、詮義に及ばず。此掟は、道理の差合を弁へて、文字になづむべからずと云事也。世流の俳諧は、姿情をわかつた。たゞ名目、文字を咎むる故に、差合、去嫌に害ありて行づまる事多し。我門には、其句意、姿情をとくとにらみて、文字、名目にかゝはらず、用なくば咎むべからず、三句去らば、殊に可也。さればとて、これは不苦、それはかまはずとて、好みて打こしにも出す族は、蕉門の論にはあらず。右差合、去嫌、季のまたげたる物、雑となり季となるべき物の穿鑿は、他にむかつて云べき篇目には非ず。是は蕉門一派の製にして、自分宗匠と成りて俳諧一座を設くべき時の沙汰也。他に対して云べからずと云々。

一 ⑨てにおはの折合といふは、下の句の中にて、文字に文字有りて、上の句の留りに同字あれば折合也。高句の中に有ば、其咎なし。或は、見れば、聞ば、それが、これが、など、付句を嫌ひて、文字は重ければ、打越をも

嫌べし。畢ぬは、打越迄を嫌ひ、不のぬは、付句斗りを嫌ふ。皆軽重の差別也。不のぬ文字差合たりとて、ずと直しても同じ不の字也。されども初心にて、其弁へなく直したらば、其分にて咎ぬが宗匠の捌也。執筆の合点と云は、鈴鹿に鹿染物の鹿の子などは、真なく、かなのくばりにて巻つらを隠しぬれば、文字の咎なし。大躰の差合も、のがるゝ也。名所、或は、人の名などに同字有物也。二句去は赦スべし。古法に打越は嫌へども、付くは苦シからぬ物多し。親子に障子、桑名に名の字、月に日次月などの類也。一理万通にして、一をあげて万の事は皆通ずる也。三句去べき物も、躰用を詮義して、二句にて赦すべし。或は、家に垣といふ類ひ、居所なれども二句にて苦しからず。是、我門の設なり。他に向て云べからずと。猶、文字と成、雑と成べき物の事。

一 ⑨① 春の物

鳥の巢、鶴の巢、鷹の巢、蜂の巢、季に用ありらば、春季たるべし。用なき時は雑とすべし。但、鷹の巢は、冬にいふ説も有也。

一 ⑨② 夏の物

鶉の巢、鳩の巢、水鳥の巢は都て夏也。但し、鳩の浮巢は決而雑也。、台子、朔日の、杓、単物、扇団、清水、汗、川波、発句にし、平句の時も、用あらば夏季也。只は、雑とすべし。三句去らば、猶く可也。

一 ⑨③ 秋の物

燈爐^(ママ)

但シ切籠といひては盆の会式なれば、決して秋のがれがたし。

煖酒、鳥おどし、放生

会の字添ては、決して秋也。

放ち鳥、野遊^{春秋に}の類、前に同じ。

一 94

冬の物

鴛、鴨、居風呂、囲炉裏、埋火、櫓、焼火、衾、紙子、夜着、蒲団、踏皮、頭巾、綿帽子、胼^(ママ)、腓^(ママ)の類、皆前に同じ。以上。

一 95

独吟俳諧 井 三物の事

独吟俳諧は、惣じて会釈遠慮すべき相手なければ、先は勝手次第たるべし。其内に、去嫌^{さりきらひ}、差合等^{さしあひ}は、猶^{なほ}吟味すべし。月花の定座は、かまひなし。たとへば、初表の四句め、五句め、六句たりとも、花の句、たより次第にする也^{なり}。まして、裏にては、何かたにてもすべし。一折に花一本、月二つの数は守るべし。有り所は、且てかまひなきと心得べし。

一 96 三つ物の事、或は歳旦、其外^{そのほか}の事にてても、三つ物といへば、世間、百韻の発句、脇、第三を引はなし、並べたる物と同じやうに覚へり。大きに非也^{なり}。三つ物の趣向は、小車のさびしく巡るがごとし。脇は、九十八句の替りにして、第三は、あげ句也^{なり}。しかれば、脇、第三に、神祇、釈教、恋、哀情、更にかまひなし。まして名所、専らに用ゆべし。第三の留り字、留勝手次第也^{なり}。是、下の四句めへ及すべき事いらざる故也^{なり}。何留^{ママ}になりとも勝手次第にして苦しからず。先は、極りたる留にあらず。字留なるべし。

一 97 本式俳諧十句表の事

表の内、名所かまはずすべし。

一 98 名残の裏六句也。其外は、常の通。

一 99 景物並べて三句すべからず。又、打越嫌ふべし。

一 100 月と花と雪と郭公、霞の類、打越を嫌ふ。

一 101 花、見渡しに一句づゝ、都合八本有べし。

一 102 月もやはり八つ有べし。然レば、名残の裏、六句の内に月花あり。其表の花の見合せ、他の季の花にすべし。

一 103 同季は、七句去也。但シ、間に他の季を隔べし。

一 104 名所とく、五句去也。降物、簗物、草木、全二句去。

一 105 月、花、松、舟、夢、泪、竹、烟、等十句去也。岩、猿、関、檜、槇、山類に成なり。

賦物の事

廿五ヶ条の事

二『鳳鳴談』という俳論書

俳論書『鳳鳴談』の素性を検討する前に、他の二つの千那伝書といわれているものに、簡単に触れておくことにする。

まず、中西啓氏報告の「蕉門千那俳諧之伝」（とタイトルに記されている）である。成立年次等の記載はまったくなく、不詳。中西氏は、解題において、「千那系俳論作法の伝書として、他にあまり聞かないので紹介しておきたい」と記されている。が、これが、実は、明和元年（一七六四）刊の俳論書『うやむやのせき』の前半分、すなわち、序文、桃青（芭蕉）の「発句切事の事」に関する一文に続けての、「十八躰引手尔葉」「発句豎横并狂句仕立様之事」「姿情の事」「虚実正事」「不易流行之事」「発句五品の事」「発句八躰之事」と一致するのである。「千那系俳諧之伝」では、序文に続けての桃青の一文が「落雁亭主人」となっている。「落雁亭主人」は、千那と見てよいであろう。以下、「十八躰」「発句豎横并狂句之事」「虚実正之事」「不易之句」「流行之句」「発句五品」「八躰之句」と続くが、本文に異同は、ほとんどない。『うやむやのせき』は、右に続けて、「奉納伝三品」「付合八躰の事」「付合八躰の七名」「付合八躰の転句」「俳諧五花の口決」「俳諧月之伝」「七夕伝の事」「月次の月の事」「名所前後の事」「本式表十句之章」となるのであるが、「蕉門千那俳諧之伝」では欠いている。

昭和三十一年（一九五六）に没している俳人西村燕々氏の著作『千那』（本福寺、大正13年7月刊）中の「略譜」（千那年譜）を見ると、

明和元年（甲申）

○幻住庵俳諧有也無也関上梓さる、これ千那の編し置きしものと云ふ。（風之の「耳底記」に「堅田の浦に雁が音ならで有也無也と鳴くもあり」とあるは此の事を指したるならんか）

と記されている。風之の「耳底記」とは、芭蕉の弟子野坡の俳論を風之が祖述した刊本（刊年不詳）『俳諧耳底記』を指す。風之は、延享四年（一七四七）に没しており、その後の刊。宝暦年間（一七五一～一七六三）の刊と考えられている。その『俳諧耳底記』の中に、芭蕉の弟子達を諸鳥に譬えた記述が見える。一部を摘記してみると、左のごとくである。

東の杉の梢に正風を守る鳥あり。美濃のほとけを甚にくむ。大廻しを自得して翁にほめられたり。近江に秀、伊賀に芳しく、堅田のうらに鴈が音ならで有也無也と鳴もあり。皆大鳥なり。吾妻にむつ千鳥、又雪中に鳴嵐といふ名鳥もあり。

といった具合である。詳しい説明は省略するが、右の文章の中に登場する芭蕉の弟子達は、順次、杉風、支考、正秀、土芳、千那、桃隣、嵐雪ということになる。燕々氏の記述に見えるように、「堅田のうらに鴈が音ならで有也無也と鳴く」大鳥は、千那と考えてよいであろう。とすると、『うやむやのせき』は、千那の著作ということになるのである。そして、この『うやむやのせき』の前半部と同内容の伝書が、「蕉門千那俳諧之伝」として存在することとは、このことを裏付けることになるのである。もっとも、某が、『うやむやのせき』と『俳諧耳底記』の右の記述を参看して、千那仮託の偽書「蕉門千那俳諧之伝」を作り上げた、という可能性がないこともない。が、『俳諧耳底記』が野坡の俳論の祖述として信憑性のあるものであるもので、『うやむやのせき』と「蕉門千那俳諧之伝」は、二つながら、千那系俳論伝書と考えてよいように思われる。冒頭の「発句切字の事」の一条の署名を、『うやむやのせき』

が、「落雁亭主人」ではなくして、「桃青」（芭蕉）としたのは、一書を、芭蕉の伝書めかして權威付けをせんとしたためであろう。

次に、太宰府天満宮・西高辻家蔵の『芭蕉雜談千那聞書』（仮名、『古典籍総合目録』による）である。この書、奥書に「右は幻住庵中にして、翁の雜談品々を、千那法師、是を書留」と見えるものである。「甘千叟藏籍」とも見える。千叟は、芳室のこと。

芭蕉が、幻住庵に滞在したのは、元祿三年（一六九〇）四月六日から七月二十三日まで。その折の句日記「凡右日記」に、千那の「軒ちかき岩梨おるな猿のあし」の一句が見え、千那が、芭蕉在庵の幻住庵に足を運んだのは事実である。その折の聞書が、『芭蕉雜談千那聞書』であるというのである。これも、あり得ないことではない。

『芭蕉雜談千那聞書』、内容は、長頭丸（貞徳）の伝書、「秘書要決」「俳諧新式」の三部より成る大部のものである。

ところが、これまた、先の「蕉門俳諧之伝」同様、類書があつたのである。石川真弘、牛見正和両氏によって紹介されている『許六芭蕉翁伝書』（『ビブリア』75、昭和55年10月）が、それである。タイトルは、石川、牛見両氏による仮題。内容は、「大秘伝白砂人集」「俳諧新々式」「俳諧新式極秘伝書」の三部より成る。許六は、三部とも、芭蕉より伝受のものとして、その時期を、元祿六年（一六九三）三月としている。この中の「大秘伝白砂人集」（含「秘書要決」と「俳諧新々式」の部分）、『芭蕉雜談千那聞書』と重なるのである。無論、許六の識語等は省略されているが、両書の内容は、一致している（字句の多少の異同はあるが）。とすると、「大秘伝白砂人集」と「俳諧新々式」（『芭蕉雜談千那聞書』では「俳諧新式」となっている）は、許六に元祿六年に伝授するに先立って、元祿三年に千那に伝授されていた、ということになるのである。

ちなみに、これとは別に、「俳諧新々式」（「俳諧新式」）中の「四季之詞」（「四季の詞」）のみを独立させての去来系の芭蕉伝書が『元禄式』と名付けられて伝わり、東聖子氏によって紹介されている（『俳文芸』30号、昭和62年12月）。この書（卷子本）には、元禄三年三月、芭蕉より去来に伝授する旨の識語が見られる。この点では、『芭蕉雜談千那聞書』と一致する。去来も、元禄三年、幻住庵滞在中の芭蕉を訪ねており、「凡右日記」に「鶏もばら／＼時か水鶏なく」の句が見える。が、この「四季の詞」の中には、東氏も指摘されているように、元禄五年作の「誰かみし春やかゞみのうらの梅」、元禄六年作の「窓形に昼寝の夢のたかむしろ」（『芭蕉雜談千那聞書』の句形による）の二つの芭蕉句が見え、伝授の時期に矛盾が生じてくるのである。とすると、『芭蕉雜談千那聞書』も、『元禄式』同様、許六系の伝書から派生したもののようにも思われるが、芭蕉句の一つ「窓形に」は、許六の「俳諧新々式」では、「窓なりに昼ねの床やたかむしろ」の句形であるので、全く同系統のものとも言い切れない。ただ、許六の言のごとく、元禄六年三月の伝授としても、「窓なりに」の一句は、同年夏の作なので、総てが解決するわけではない（この点も、すでに東氏が指摘されている）。

*

ということ、いよいよ千那伝書『鳳鳴談』の検討である。

『鳳鳴談』を繙くと、遊び紙に続いて、墨付第二丁の表に、

芭蕉翁直指

千那律師正伝

と記されている。「直指」は、仏教用語で、「直ちに指し示すこと。たとえば因縁などの方便を用いず、言葉や文字などにわたらず、端的に指し示すこと」（『禅学大辞典』）である。「正伝」も、同様、「正しい伝統。師から弟子へ正

しく仏法を伝えること、また、その仏法をいう」(同)というのが、本来の意味である。「律師」は、僧官。僧正、僧都に次ぎ、正・権の二階に分かれ、五位に準ずる。真宗本願寺派本福寺十一世住職千那は、宝永二年(一七〇五)四月、権律師に勅許されている。没年は、享保八年(一七二三)、享年七十三。宝永二年は、五十五歳である。

すなわち、右の二行は、芭蕉俳諧の要諦が千那に伝授されたことを示すものであり、『鳳鳴談』が、千那の伝書であることを語っているのである。『鳳鳴談』転写の時期は明らかにされていないが、ただ、「千那律師」とあるので、宝永二年以降であることは明らか。千那没後と考えるのが自然か。

そして、『鳳鳴談』の巻末、墨付三十六丁目の表裏、三十七丁目の裏には、次のように記されているのである。

印

右蕉門直指之要旨必不可疎見者也

永田白輅 行兌

寛政七乙卯年六月

印 印

鈴木静正子

印 印

この中で、最初の印と一行目が、三十六丁の表、そして「鈴木静正子」までが三十六丁の裏、最後の二つの印が三十七丁の裏に押されている。「右蕉門直指之要旨必不可疎見者也」「永田白輅 行兌」「寛政七乙卯年六月」「鈴木静正子」は、同筆。本文とは別筆である。「疎見」が明らかでないが、要は、『鳳鳴談』は、蕉門の要諦が記されているので、やたらに見せてはいけない書物である、というのであろう。「疎見」は、伝書類に散見する「他見」と同義と解しておく。「永田白輅 行兌」の「行兌」も解らない。明治期の刊行物に見える「発兌」は、書籍、雑誌など

を印刷、発売すること、すなわち「発行」の意であるが、そうではあるまい。「兌」に「換」の意味があるので、千那にかわって白輅が『鳳鳴談』の管理をする、との意味であろうか。あるいは、「伝授」と同様の意味に用い、恐らくは弟子であろう「鈴木静正」に『鳳鳴談』を与えるということであろうか。不明。

ところで、「永田白輅」なる人物である。平林鳳二・大西一外著『新選俳諧年表』（書画珍本雑誌社、大正12年12月刊）に収録されていて、次のように記されている。

◇白輅、永田氏、枝法庵、半閑室二世と号す、蝶羽門、遠州浜松人。

これで、『鳳鳴談』が、一度は蝶羽門の俳人白輅の手にわたったことが明らかとなるのである。ちなみに、印は、「右蕉門^{云々}」の右側は、「二枝仏法」と、署名の左側は、それぞれ、「枝法」「白輅」と読める。ちなみに、白輅の師蝶羽は、蕉門知足の長男。寛保元年（一七四一）、六十五歳で没している。石田元季氏の『俳文学考説』（至文堂、昭和13年5月刊）中の「鳴海、および、鳴海俳人」によれば蝶羽は、堅田本福寺十二世住職、千那の養嗣角上、あるいは、先の『芭蕉雑談千那聞書』の旧蔵者、才麿門の甘千叟（芳室）とも交流があった由である。とすれば、千那伝書『鳳鳴談』が、千那、角上、蝶羽経由で、白輅の蔵するところとなったのも、十分に首肯し得るのである。

白輅の生没年は目下のところ定かでないが、大津義仲寺の『しぐれ会』に安永二年（一七七三）より、毎年出句しており、寛政十年（一七九八）を最後としてその名が見えなくなるので、寛政十年、あるいは十一年を没年と推定し得るのである（文化九年以降、文化十四年に至り再登場するが、別人、二世白輅か）。しかして、「枝法」「白輅」印の上に記されている「寛政七乙卯年六月」は、白輅が、寛政七年（一七九五）、『鳳鳴談』を「鈴木静正」へ伝授するに際して記した日付、と判断してよいであろうか。なお、『しぐれ会』に出句する白輅、当然、蝶夢とも交流があるわけであり（パンフレット『芭蕉と静岡俳諧の流れ展』駿府博物館、平成2年9月、に白輅の項があり、蝶夢

門とする。高木蒼梧著『義仲寺と蝶夢』〈義仲寺史蹟保存会、昭和47年11月刊〉には、白輅宛蝶夢書簡が数多く収められている。その中には、表徳号「枝法」は蝶夢によるものであること、俳号の改名のこと等が見え、白輅が蝶夢に親炙していた様子が窺える。いま一つはつきりしないが、『新選俳諧年表』の「蝶羽門」の記述、ひょっとして「蝶夢門」（蝶夢は寛政七年没、六十四歳）の誤りではないか、とも考えられるが、勿論、白輅が、寛保元年（一七四一）に六十五歳で没している蝶羽の晩年の弟子であるとしても、白輅の年齢次第では、少しも不自然ではない。後考を期したい。続いて見える「鈴木静正」なる人物については、不詳。これで、『鳳鳴談』の素性の検討は、切り上げることにする。

三 千那と俳論

『鳳鳴談』が千那の俳論書と仮定して、千那に芭蕉（蕉風）俳論に対する関心があったのか、否か、その辺を見ておくことにしたい。

去来の俳論『去来抄』〈修行〉における次の一条が注目される。

宇鹿曰、「先師、十七の付方を路通に伝授し侍る」。去来曰、「遠境の門人の願に依て、付方を書出し給ふ。されど、後々ばせをが付方は是に限りたりと、人の迷ひならんと、是を捨られしと也。其書出し給ふ分、十七条とやらん聞たり。是を伝授し給ふ事をしらず。大津にての事とやらんなれば、路通、もし其反古を拾ひて人に教ゆるにや」。許六曰、「此事を願ひたるは千那法師也」。

許六と千那との親交は、荻野清氏が、その著『芭蕉論考』（養徳社、昭和24年4月刊）所収の「近江蕉門の分裂と芭蕉」において「許六撰の『韻塞』（元禄九年）及び『篇突』（同十一年）によれば、千那は或る期間許六と相許し

たらしい」と述べておられるところである。その許六が、俳諧の付方伝授（右に「十七条」との言葉が見える）に
関して、「此事を願ひたるは千那法師也」と発言していることは、大いに注意してよいであろう。千那が、付方伝授
をはじめとして、芭蕉俳論の継承に関心を持っていたことが窺知し得るのである。とすれば、千那に、「蕉門千那俳
諧之伝」や『芭蕉雑談千那聞書』とは別に、きわめて千那色の強い一冊の俳論書『鳳鳴談』が残っていることは、
十分に首肯されるのである。『鳳鳴談』が、付方について、かなりのスペースを割いて論じていることは、先の翻刻
に窺える通りである。

さらに、『去来抄』の「十七条」に即して言うならば、③の「同（付合）趣向八つ有事^{ある}」の項に「其人」「其場」
「其物」「其噂」「天象」「観想」「面影」「時分」の八つが、④の「心持に四つの品有事^{ある}」の項に「有心」「会釈」「拍
子」「遁句」の四つ、それに加えて、「気色」「匂ひ」「ひゞき」「はしらかし」「推量」の五つが示されているのであ
る（千那伝書とされる『うやむやのせき』にも「付合八昧の事」「付合八昧の七名」に同様な記述があるが、名目に
異同があり、十七条を数えることもできない）。総てで、付方十七条が示されていることになる。仰々しく十七条と
銘打っていないだけに、かえって信憑性があるように思われる。先の荻野清氏の論考に明らかにされているが、千
那は、元禄四年（一六九一）以降、芭蕉から離反している（この点については、別稿で詳しく論ずる予定でいる）。
芭蕉への入門は、貞享二年（一六八五）である。この七年間に、芭蕉俳論への執心浅からず、その要諦を貪欲なま
でに、自らのものとして、摂取したのであろう。その結果としての『鳳鳴談』一卷であったように思われる。

四 千那俳論書としての内部徴証

『鳳鳴談』一卷は、千那による俳論書と（あるいは、少なくとも千那系の俳論書と）断じてよいであろうか。その

ことを、内部徴証によつて論じてみることにしたい。その折、便宜、引用する句文の前後に、私の付した通し番号を記しておくので、翻刻本文を参照いただきたい。

まず、これは、『鳳鳴談』の成立時期とも微妙にかかわってくるのであるが、『鳳鳴談』が参照している先行俳書、俳論書で、その名が本文中に明記されているものを概観しておくことにする。『冬ノ日集』(35)、『コッケイ伝』(43)(68)、『廿五ヶ条』(50)、『おだまき』『はなひ』(77)である。『冬ノ日集』は、貞享二年(一六八五)刊、荷兮編の俳諧撰集『冬の日』。『コッケイ伝』は、許六の俳諧史論集『歴代滑稽伝』で、許六没後すぐの正徳五年(一七一五)に公刊されている。病床での執筆である。千那に関して、『其ころ故郷伊賀に立帰ける道の紀を『草枕』とも『野ざらしの紀行』共いふ。大津千那・尚白・青亜三人、師としたのむ』と記されている。蕉門の代表的な人々が列举され、『其の門人は一々しるすにいとまあらず』とされているので、千那は、許六に認められていた芭蕉の弟子の一人ということである(なお詳しい許六の千那評は、元祿十一年成立の『俳諧問答』〈同門評判〉に見えるが、今は省略する)。これによつて、千那の『鳳鳴談』が、文字通り千那の手になるものであるとすると、正徳五年(一七一五)以降、千那の没する享保八年(一七二三)までの間の執筆ということになるのである。『廿五ヶ条』は、『歴代滑稽伝』の巻末に「近年二十五ヶ条の秘訣など、去来より相伝したりとて金銀をむさぼり、しらぬ人をたぶらかすよし、沙汰のかぎり、偽にて大うそ也。愚老が『宇陀法師』撰する時、二十五ヶ条ばかりの秘訣あるよし、書くれよ、とたのむゆへに書記したる物也」と見える。『二十五ヶ条』(『ひるのにしき』)の公刊は、享保二十一年(一七三六)であるが(堀切実氏の『蕉風俳論の研究』明治書院、昭和57年4月刊、所収「『二十五条』諸本の系統」参照)、千那が没して以降ということなので、千那が披見したものは写本であろう。写本によつても、かなりの数が流布していたようである。「宵闇の句、月に用られたる事、廿五ヶ条にくわし」(50)は、『二十五ヶ条』中の「宵闇の句の事」

の記述を指す。『おだまき』『はなひ』は、それぞれ、元祿四年（一六九一）刊の『俳諧をだまき』（筆者架蔵本の刊記による）、寛文四年（一六六四）刊の『はなひ草大全』（寛永十三年奥書の『はなひ草』を増補したもの）を指すのであろう。なお、これ以外にも、多くの先行俳書、俳論書が参照されていると思われるが、今は、省略に従う（後に、一部触れる）。

そこで、いよいよ、千那俳論書としての『鳳鳴談』の内部徴証である。

『鳳鳴談』の大きな特色は、発句、付句ともに、例句として、千那自身の句、あるいは千那周辺の俳人の句が用いられている、ということである。これは、『鳳鳴談』が、千那自身によって著された可能性のすこぶる大きいことを示すものである。千那自身の手に成らなかったとしても、少なくとも、千那のごくごく身近の（例えば、弟子の千梅、あるいは養嗣角上などといった）人々によって祖述された千那俳論書であることは、間違いないところであると思われる。

今、まずは、千那の発句に限って左に示してみる。

⑦ 追出しのうきねに花の朝鳥 千那

⑧ 馬籠にわかれてひとり秋の暮 千那

⑨ 夏の月白波さけぶ由井の浜 千那

の三句である。⑦は、「切字の伝」中の「落着したる句」として、芭蕉の〈咲みだす桃の中よりはつ桜〉、曾良の〈行くて倒^{たふ}臥とも萩の原〉の二句に並べて自句を示したもの。⑧は「下の五文字切」の例で、これも、芭蕉の〈眉掃を面影にして紅の花〉に並べて示したもの。⑨は、「韻字切、又、三段切とも云」の例。芭蕉の〈奈良七重七堂伽藍八重桜〉と、千梅の句の中に置かれている。千梅の句については、後に触れる。

そこで問題となるのは、この三句、正真正銘、千那の作品であるか否か、ということである。

まず「追出しの」(⑦)の一句からである。「追出し」は、「追出しの鐘」、すなわち、明け六つ(今の午前六時ごろ)の鐘である。この句、昭和十一年(一九三六)に出ている安井小洒編『蕉門名家句集』(なつめや書店)の千那の項にも、それを補訂しての、昭和四十六年(一九七二)の石川真弘・木村三四吾校注『蕉門名家句集』(古典俳文学大系、集英社)の千那の項にも見えない。さて困った、本当に千那の句かしら、と思っていたところ、あったのである。出典は、正徳三年(一七一三)の自跋のある千那の著作『白馬紀行』に載っていたのである。『白馬紀行』、『国書総目録』によれば、本福寺に原本があるのみで、他には写本等伝存していないようである。私は、西村燕々氏の『千那』によって確認し得た。『千那』には、『白馬紀行』の発句は、総て収録されている。新旧『蕉門名家句集』は、総て抜け落ちているのである。さて、その句、『白馬紀行』に、

三月二十八日首途

追出しのうき音に花の朝鳥

と見えるのである。私は、「追出し」は、遊里のそれかと考え、『鳳鳴談』の「うきね」を「浮き寝」と解していたが、『白馬紀行』によって「うき音」(浮き音)であることが判明した。午前六時、鐘の音とともに首途^{かどで}、朝鳥は、はやくも花と戯れている、というのである。

ところで、右の事実により、『鳳鳴談』が、千那自身の著作によるものであることが、すこぶる濃厚になってきた。へ追出しのの一句が、公刊された俳書類には収録されていない一句だからである。面白い句ではあるが、ポピュラリティーは、零^{ゼロ}である。この句を、自らの著作に使えるのは、千那自身と考えてよいのではなからうか。百歩譲って、養嗣で、本福寺十二世住職の角上か。角上には、紀行に対する質疑に対して千那が答えた『白馬紀行口耳』

の著作（聞書）があるからである（『千那』参照）。角上、また芭蕉に^{（一）}対面している。延享四年（一七四七）没。享年八十四（七十三歳説もある）。

次に〈馬竈に〉（⑱）の一句である。この句は、享保八年（一七二三）四月十七日没している千那への追悼集、という形を途中から採った（千那生前より編集がはじまっており、当初は、単なる千那グループの撰集であった）、千那の弟子千梅（林亜靖）編、享保十年（一七二五）刊『鎌倉海道』に見える。千梅の序は、享保九年春、刊記は、享保十年九月である。この中に、

越の新潟と云所よりしれる人の

おくりけるに別るゝとて

馬駕にわかれてふたり、秋のくれ 千那

と見える（傍点筆者）。ところが、『鳳鳴談』の句形は、〈馬竈にわかれてひとり、秋の暮〉なのである。「ふたり」でも「ひとり」でも、句意は通じる。「ふたり」の場合は、二人はここで別れるけれども、「しれる人」も、私千那も、淋しい「秋の暮」の中にいることだ（『鳳鳴談』の①に「秋の暮は、秋の夕間暮と云事也」と見える）、との意味となり、「ひとり」の場合は、「しれる人」と別れて、「ひとり」となると、「秋の暮」のさびしさが、ひとときわ身に^{（二）}応える、との句意となるのである。芭蕉句へ此道や行人なしに秋の暮が意識されているとすれば、やはり、「ひとり」がふさわしいように思われるが、いかがであろうか。少なくとも、誤伝ということでは片付けてしまえない問題であろう。

ということ、この〈馬竈に〉の句の場合も、『鎌倉海道』とは別種の、しかも作品として良質の句形を伝えている点において、『鳳鳴談』は、大いに注目されるのである。このような句形を、例句として提示できるのは、千那し

かないのではなからうか。かくて、『鳳鳴談』が、千那の執筆になる俳論書の可能性は、ますます強くなってきたのである。

三つ目の〈夏の月〉(19)に移る。これも、〈追出しの〉〈馬籠に〉同様、間違いなく千那句である。『蕉門名家句集』は、享保四年(一七一九)跋の苗村文里斎宰陀編『宰陀稿本』(現在は、天理図書館綿屋文庫蔵)の左のごとき句形を採録している。

由井にて

夏の月白波さけぶ由井が浜

また、西村燕々著『千那』には、出典は不明ながら(『白馬紀行』の〈あの波のさけぶ下にも夏の月〉の異形句として)、

夏の月へら浪さけぶ由井の浜

の句形が掲げられているのである。「へら浪」は、恐らく「しら浪」の誤植であろう(『千那』、時に、明らかに誤植と思われる箇所もある)。とすると、『鳳鳴談』の〈夏の月白波さけぶ由井の浜〉の句形も、首肯されてよいことになる(「由井の浜」「由井が浜」の小さな相違であるが)。

しかして、この〈夏の月〉の一句も、『宰陀稿本』という特殊な俳書に収まるのみであり、〈追出しの〉の一句同様、この句を俳論の例句として用いることができるのは、千那その人しかいないと考えるのが自然であろう。かくて、『鳳鳴談』千那執筆の可能性が、ますます高くなったと思われるのであるが、如何であろうか。勿論、『鳳鳴談』を細部に見ていくならば、千那の自筆ではなく、転写本故に、明らかなる記述の誤りも指摘し得るのであるが、原『鳳鳴談』は、養嗣角上の聞書というよりも、千那自身の著述と断定してよいように思われるのである。

千那周辺の俳人達の発句に注目してみる。

⑮香の火に尼の相住鹿の声 左角

⑯吹れ行身は七里半ちる一葉 千梅

〈香の火に〉(⑮)は「下ノ五文字切」の翁(芭蕉)、千那以外の用例として挙げられているものであり、〈吹れ行〉は、「韻字切、又、三段切とも云」の、これまた、翁(芭蕉)、千那以外の用例として掲げられている一句である。この二句は、ともに、先に触れた、享保十年(一七二五)刊、千梅編の『鎌倉海道』に見える作品である。⑮は、下巻に秋の句として、⑯は、上巻に旅の句(桑名)として収められており、句形に異同はない。左角は、佐角とも。壺中園。支考門。享保十九年(一七三四)没。千梅とは、竹馬の友。千梅は、千那門。明和六年(一七六九)、八十歳で没している。亜靖号から千梅号となったのは、宝永六年(一七〇九)のこと。ということで、千那周辺の二俳人の『鳳鳴談』への入集も、『鳳鳴談』が、千那の著作に成るものであることを傍証し得るであろう。『鎌倉海道』は、千那生前より編集が企図されており、出版以前に、千那が両作品を目にする機会は、大であったと思われるのである。両句とも、他の俳論集には見えない作品であり、千那が独自の見識によって掲出したと思われるのである。『鳳鳴談』中の芭蕉句三十二句(⑤⑦⑪⑬⑭⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓⑥⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺)の検討も、興味深いものがあるが、今は、紙数の関係で、省略に従わざるを得ない。この三十二句の芭蕉句は、元禄十五年(一七〇二)刊、李由・許六編の俳論書『宇陀法師』、そして、享保十五年(一七三〇)刊の支考門の俳論書『俳諧古今抄』の芭蕉句と重なるのであるが、『鳳鳴談』には、独自の見解が示されている。特に、『鳳鳴談』が千那の著作であるとして、正徳五年(一七一五)より享保八年(一七二三)の間の成立と考えると、無論『俳諧古今抄』は参照されていないので、「心切」(⑥⑨)、「中の切」(⑩⑲)、「挨拶切」(⑪⑲)、「四ッの切」(⑫⑲)、「を廻」に廻し(⑬⑲)、「押へ字」

(74)、「句読切て云々」(75)、「切所なくして云々」(76)等の「蕉門に習の切字の事」は、はやい時期の、例句を示しての貴重な切字論と言えるのである(なお、久保田敏子著『中興俳諧の周辺』遺稿集刊行会、昭和59年4月刊、所収の「蕉門切字十八ヶ条」を参照されたい)。なお、『鳳鳴談』が、芭蕉句を掲出するに際して、「翁」あるいは、「古翁」としているのも、注意しておいてよいであろう。

千那俳論書としての『鳳鳴談』位置付けのための内部徴証を切り上げるに際して、『鳳鳴談』が引く芭蕉の遺語に注目しておくことにする。

④6 当時、俳諧はつかぬが能とて、程らい知らず、別々の事ならべ侍る、言語道断の事也。先師の曰、俳諧の連歌也。能付といふ字心也。今蕉門の骨髓といふは、間に髪といれず、一字も動かしがたきこそ俳諧の連歌とは云べけれ。又、付句と付るとの差別也と云り。付といふは、自然の道理也。

この遺語に関して、まず、元禄十五年(一七〇二)刊の李由・許六編『宇陀の法師』に、
当時世間の俳諧はつかぬがよきとてほどらいをしらず。百句共にならべたる物也。されば五句七句引のけても、又二句三句入ても其きは見えず。当流は間に髪と不入、一字も動かし難し。つけるとつくとの差別也。人作分別にて付る故に理屈に落る也。つくと云は自然につく也。師云、俳諧の連歌と云はよく付と云字意也。心敬僧都の私語にも、前の句に心のかよはざるは、たゞむなしき人のいつくしくさうぞきてならびるたる成べし、とはいへり。

と見える。この『宇陀の法師』を参照しての、同じく元禄十五年の成立と考えられている土芳の『三冊子』へ赤雙紙には、左のごとく記されている。

師のいはく、俳諧の連歌といふは、よく付といふ字意也。心敬僧都の私語にも、前句に心のかよはざるは、たゞ

むなしき人のいつくしくさうはきて、ならび居たるなるべし、と或俳書に有^{あり}。

三者三様、大變興味深い。『鳳鳴談』が、「宇陀の法師」を参照して論述したと考えるのが自然なのであろうか（『宇陀の法師』披見は確實。後述する）。芭蕉の遺語が、どこからどこまでであるか、という問題もおこってくる。千那の（としておく）『鳳鳴談』の記述は、李由・許六編『宇陀の法師』や、土芳の『三冊子』に比して遜色ないばかりか、文意は、一番闡明にされているようにも思われる。なによりも、措辞の一つ一つに、千那の釈義が、明確に示されている。『鳳鳴談』の俳論書としての質の高さが、ここにも窺知し得るのである。

五 『鳳鳴談』を読む

俳論書としての『鳳鳴談』の魅力、面白さを論じるには、所与の紙数があまりにも足りないので、ここでは、俳諧本質論の一節に絞って、少しく検討を加えてみることにしたい。

③⑦俳諧付合の本情を、古へ宗祇翁などの記置給ひし物にて思ひ合するに、誠に世の教戒に成ぬべきわざならんにこそ。彼記曰、夫、敷嶋の和歌の道は、心、言葉高^{たか}うして、今更いふべくもあらず。連歌といふ物は、始より聊^{いささ}歌書の片端をも学ばずしては、一句一言も云がたき道也。俳諧は俗談平話によりて人の心を述侍れば、先、其道に入事、安し。扱、僅に道に入ぬれば、則、田夫野人も花鳥に心を寄せ、四季折くのことぐさを翫^{もてあそ}びて、風雅、風情のやさしき心を弁ふるより、自然に上古の風俗をも知り、をのづから人の人たる道にも至ぬべきわざ也。頑愚、卑賤の族、何となきやさしき心にも成り、世の情をも弁ふべき道、俳諧より速か成はなしと云し。されば、日々のわざを俳諧になして、かれに付合を付て見るべし。かりにも不忠不孝成べからず。及び、無理、非道、邪路に入べからざるの道理、明也。たとへば、年若き人の、忒親にいたくいさめられん時、

腹だゝしき心の出んに、親といふ句に、子として腹立ん付句を付て見るべし。全俳諧の本意にあらずして、付合に成べからず。彼親の打杖のよわきを悲しびし心こそ、前句へ能のりて、付合の本意成べけれ。此本情を実にしらば、など腹立ッ心の直ひるがへりて、孝心もおこらざらましや。又、主君につかふる人の、おほやけ事を後になして、己が心の趣く方に行ひもて行たらんは、付合に成べからず。総て、兄弟、交友の世間の事に付ても、日々の諺、俳諧の付合になして見ば、少しも邪に趣べき道なからまし。

付合本質論は、宗祇から入っている。宗祇の名前は、⑤②にも出てくる。これは、『笈の小文』の冒頭の一節に見える「西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり」にも窺えるごとく、芭蕉の影響と見てよいであろう。が、残念ながら、『鳳鳴談』が掲げるところの『彼記』の具体的な書名（連歌論名）、従つて宗祇の言葉「夫、敷嶋の和歌の道は、心、言葉高ッして、今更いふべくもあらず。連歌といふ物は、始より聊歌書の片端をも学ばずしては、一句一言も云がたき道也」の出所も、不詳である。このよきな見解は、連歌論においては、珍しくなく、例えば、宗祇よりもはやく、二条良基の連歌論書『知連抄』（応安七年成立）の冒頭に「連歌は歌をもつて文として、和歌のたよりをわきまへて後、こと葉を分て連歌に取なす也。習おほしといへども、大方是にしかず」と見えるごとくである。宗祇の師心敬も、『所々返答』（成立不詳）において「大概、世間の先達になり給はん好士は、歌をならべて修行稽古あるべき事か、歌の方かけ侍ては、かたくなゝる事多く、長、しなの方遅れ侍るべく哉」と述べているのである。これらの考え方は、当然、宗祇にも継承されていたと思われるが、『吾妻問答』はじめ、管見の宗祇の連歌論の中には「夫、敷嶋の和歌の道は、云々」の一節を見出すことはできなかった。千那が、宗祇の連歌論書『長六丈』（文正五年成）の一節「所詮、連歌をあそばし候はんずると思召し候はゞ、古き歌の心も深く、詞もうつくしく候はんずるを、常に口にふれ打ち案じなど候へば、自らおほ

えずして其便そのたよりをうる事あるべし」を、千那流にアレンジしたものであろうか。

俳諧に視点を移しての最初に「俗談平話」なる蕉門の代表的な俳論用語が出てきて、注目させられる。が、よく知られているわりには、あまり用例のない俳論用語でもある。『二十五箇条』に「ある人問曰とひていはく、はいかいは何のためにする事ぞや。答曰こたへていはく、俗談平話をたゞさむがためなり」と見えるのが、よく知られている。が、この言にこだわったものではない。むしろ、元禄十一年（一六九八）刊、李由・許六編『篇突へんつき』中の「俳諧は俗語平話をのべ侍れば、誰もくよくいひ習ひたるに似侍れ共ども、しる人の耳にはいと浅間しき事のみ多し」の用法に近い使い方である。『鳳鳴談』は、俳諧は、「俗談平話」ゆえに「田夫野人」も「其道そのみちに入事いり、安し」と述べ、以下の「風雅、風情」論へと繋げているのである。この部分、『去来抄』〈修行〉の「蕉門のホ句は、一字不通の田夫、十歳以下の小兒も時に寄ては好句あり」との一節も想起され、芭蕉俳論の要諦を祖述しての千那俳論と考えると、矛盾を来たさなないように思われる。

注目すべきは、この次、すなわち、「されば、日々のわさを俳諧になして」以降、末尾までの記述である。

すなわち、この部分、鬼貫おにつらの、享保三年（一七一八）刊の俳論書『独ごと』中の記述と酷似しているのである。『独ごと』中の必要箇所を、摘記してみる。

大かたの人は、口にまかせていひつゞくるをこの道の達者なりと心得て、更に我に益ある事をしらず。俳諧は、只、まことにもとづく中立なりと心をよせて修行すべし。たとへばわかき人の親にいたくいさめられん時、腹だゝしきころの出る事あらば、親といふ前句に子として腹立うづる躰を付句に取なをして見侍るべし。全くのりなじみはあらじ。又、打杖うづのよはきをかなしめる心ならばよくなじむべし。さあれば、親にむかひて蜂吹は、神慮しんりょにもにくませ給ふ所なりとおそれて、孝心にもとづき、あるは人につかふる身の慰むかたにいぎなはれて、

用をうしろになす心をも付句に取なをしてそれを改め、或は、他人のまじはりだに四海みな兄弟なりと心のあゆみをつけ、常のわざを俳諧になぞらへ、はいかいを又つねのむつまじ事に案じよらば、自然と句毎にのりなじみも出来ぬべし。

俳諧は和歌のはしなれば、心を種として万づのことの葉となり、目に見えぬ鬼神をも哀とおもはせ、猛きものゝふをもなぐさむる道とこそ聞しか。俳諧を修して、まことの道を行侍らば、なきけしらぬ人すら情をしり、あるは不孝不忠の人も不の字をとをさくべし。只、世に交はりてさしむく所を前句に立て、ひとつく付句に取るなをして考^{かんがへ}見るべし。前句と付句と肌もあはず、のりなじみのなき時は、是^{これ}、すなをの道にあらじとたしなみ改むべき事にこそ。(傍点筆者)

『鳳鳴談』と『独ごと』を比べれば、その符合は、一読明らかであろう。両論とも、俳諧付合論の本質論と、「俳諧の益」論とが交差している。

便宜、『鳳鳴談』の著者を、これまでの考察を考慮して、千那として話を進める。

『独ごと』が公刊された享保三年(一七一八)八月、鬼貫^{おにつら}自身は、五十八歳、千那は、六十八歳である。無論、千那が『独ごと』を披見し得る可能性は、すこぶる大である。この時点での蕉門の論客中の生存者は、去来は宝永元年(一七〇四)没、許六は正徳五年(一七一五)没、浪化は、元禄十六年(一七〇三)没、北枝は享保三年五月没、ということ、支考、野坡、土芳といったところである。この三人の中で、野坡は、『袖日記』(元禄十五年頃成立)を、土芳は、『三冊子』(元禄十五年頃成立)を書き終えていたので、鬼貫の『独ごと』への関心は薄かったかもしれない。支考は、支考で、独自の俳論を展開しているので、これまた、『独ごと』は、関心の埒外の書ということ

あつたのであろう。

そんな中で、一人、余儀なく蕉風の離反者の位置にあつた千那が、比較的自由的な立場で、『独ごと』を披見し、右の二条に関心を示した、ということだったのでなかろうか。無論、逆のケースも、まったく考えられないわけではない。両俳論に共通している付合論の譬喩が、実は、芭蕉を発信地とする（芭蕉は、例えば、「かるみ」を説いて、『鴻鴈の羹あつものラステ、芳草ノ汁ヲス、レ」のごとく、譬喩の名人である）もので、蕉門の人々（支考、惟然、路通、園女、之道、舍羅、素龍等）と交流のあつた鬼貫が、それを、その中の誰かから聞き、自らの俳論に援用した、というケースである。例の、元祿五年（一六九二）の千那の序のある尚白の俳諧撰集『忘梅』には、鬼貫の「永き日やあそび暮たら大津馬」の一句が見えるが、千那と鬼貫との間に、さほど親しい交流があつたとも思えない。すると、支考か路通か。支考経由であるとすれば、『鳳鳴談』『独ごと』共通の譬喩が、数ある支考俳論書の中いづれかに紹介されていてもよいように思われるが、どこにもない。路通経由で鬼貫に伝えられた可能性は、なくもない。先に、『去来抄』へ修行へ見たように、路通は、付方十七条に関心を示しており、去来は、「路通、もし其反古を拾ひて人に教わるにや」との見解を示しているからである。そして、その折、許六は、「此事このことを願ひたるは千那法師也」と語つたのであつた。

『鳳鳴談』が一条にまとめているところを、『独ごと』は、二条に分けて論述しているわけであるが、両書とも、それぞれ論旨鮮明であり、論に破綻は見られない。両書の大きな違いは、鬼貫の『独ごと』の中に見られる「のりなじみ」なる俳論用語である。これは、蕉門も含めて、他の俳論書類には見られない鬼貫俳論のオリジナリティーと言つてよいであろう。この「のりなじみ」を説明するに用いた譬喩と考えれば、鬼貫を発祥とする譬喩と考えるのが、自然なのであろうか。それなら、なぜ、それを参照、援用したであろう『鳳鳴談』から、「のりなじみ」の語

が消えてしまったのか、という問題が浮び上ってくる。千那は、「能^{よく}のりて」とは言っているが、「のりなじみ」の語は用いていず、「付合の本意」を説明するために用いている。これは、千那が、鬼貫俳論のオリジナリティーを尊重し、そのまま借用することを遠慮した、と考えるならば、一応、解決は付くのである。

『鳳鳴談』が、独自の俳諧観を披瀝しながらも、先行俳論書によく目配りしていることは、すでに述べた。さらに加えるならば、⑩の「遊ぶや」の例としての許六の「出女になげて通るや大根引」の句は、李由・許六編、元禄十五年（一七〇二）刊の『宇陀の法師』以外には、出典の知られないものであるので、千那が『宇陀の法師』を披見していたことは、確実、といった具合である。

そして、私は、先に、『鳳鳴談』が、正徳五年（二七一五）刊の許六の『歴代滑稽伝』に言及している点より、その成立を、正徳五年より、千那が没する享保八年（一七二三）四月までの間、と推定した。ところが、右に検討したごとく、千那が、鬼貫の『独ごと』を参照、援用して『鳳鳴談』を書いたとするならば（その可能性、すこぶる大である）、その成立時期は、さらに限定し得るわけで、享保三年（二七一八）八月（『独ごと』の刊記による）より、享保八年四月までの間、ということになるのである。

六 ま と め

以上、スペースの関係もあり、かなりの駆け足で、私架蔵の俳論書『鳳鳴談』に検討を加えてみた。その結果、千那自身による俳論の伝書と断定してよいように思われる。千那以外の者で、執筆可能な者は、養嗣、角上ぐらいであるが、わざわざ角上を持ち出すまでもないであろう。成立は、右に見たように、目下のところ享保三年より享保九年の間としておく（さらに詳しい検討によって、もっと限定し得るかもしれない）。

その俳論の特色は、右の一条の検討からも窺知し得るごとく、先行の諸俳論書を参照しつつも、よくそれらを自らのものとして消化して、芭蕉俳論の系譜の中で独自の俳論を展開しており、芭蕉俳論そのものを検討するに際して、参考となるところ大である。特に、本質論よりも、具体的な作法論、法式論に重点が置かれているので、芭蕉関係の俳諧作品の解明、解読に資するところ大であると思われる。

（平成六年（一九九四）五月八日了）

〔追記〕

平成六年版『連句年鑑』（連句協会、平成6年10月刊）所収の拙稿〈千那俳論書『鳳鳴談』の付合論〉も参照いただければ幸甚である。